

佐紀古墳群東群で新発見の大型前方後円墳

平城宮跡の北側には、4～5世紀に造られた古墳が集まる「佐紀古墳群」があります。全長200mをこえる大型前方後円墳8基を中心として、約70基の古墳が確認されています。

しかし、奈良時代に平城京が造営された際、いくつもの古墳が壊されたことが知られています。例えば、本来の全長は約253mあった市庭古墳(平城陵)は、後円部の一部を残して削られています。このような大型前方後円墳ですら破壊されてしまっているため、中小規模古墳はことごとく壊されたようです。法華寺の東側では、全長100m程度の法華寺垣内古墳なども見つかっています。ここで紹介する佐紀池ノ尻古墳も、平城京の造営に伴い破壊された古墳のひとつです。なお、名称は該当地の小字「池ノ尻」に古墳群名の「佐紀」を冠して仮称しました。

佐紀古墳群東群と佐紀池ノ尻古墳

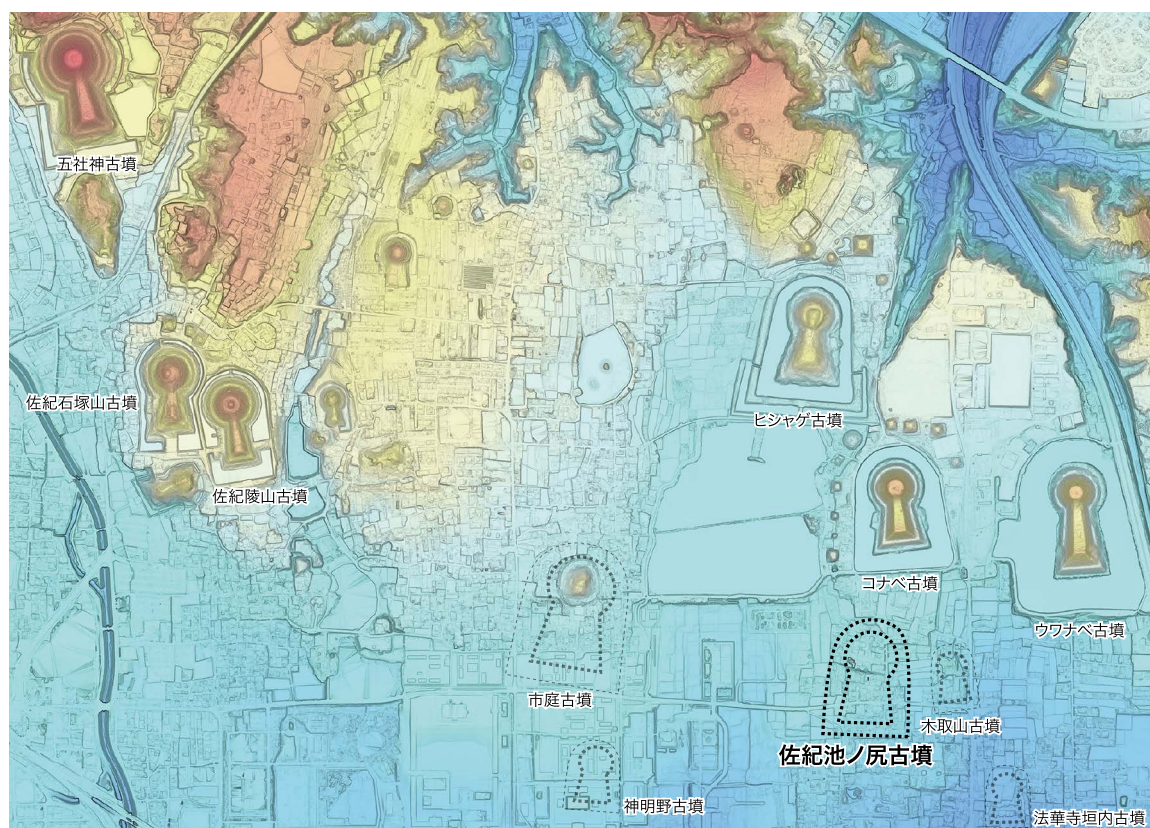
佐紀池ノ尻古墳の北側には、5世紀初頭のコナベ古墳があります。一方、東に木取山古墳、南東

(仮称)佐紀池ノ尻古墳 法華寺町に法華寺垣内古墳と、削られた中型前方後円墳のあったことが知られています。これらは立地から、佐紀古墳群に含まれる古墳と考えられます。

佐紀古墳群は、大きく佐紀陵山古墳などの西群と、コナベ古墳などの東群に分けることができ、前者が4世紀、後者が5世紀を主とします。埴輪からみると、ちょうど規格性の高い埴輪が量産されるタイミングとも重なることから、画期性をもって西群から東群へ移行したと考えられてきました。佐紀池ノ尻古墳は、立地的には東群に含まれますが、以下の通り、出土した埴輪や規模が新たな知見をもたらすものとして注目できます。

佐紀池ノ尻古墳の発掘調査とその規模

今回報告するのは、個人住宅に伴う小規模な発掘調査(HJ第783次調査)の成果です。この調査では、埴輪や転落石を含む腐植土層が最下層にある大溝を確認しました。発掘区内で溝の端は確認出来ませんでした。西側(奈文研647次調査)と北側(奈文研582次調査)の調査成果か



佐紀池ノ尻古墳の位置と佐紀古墳群

ら、溝の幅は約 30m、深さ 2.3m 以上となります。出土遺物や堆積状態から古墳の周濠と判断でき、その幅はコナベ古墳に匹敵する規模です。

空中写真や航空レーザ測量から読み取った微地形、周辺の発掘調査成果をふまえると、北でやや東に振れる盾形周濠（南北約 260m、東西約 200m）を復元できます。前方後円墳と想定した場合の後円部～鞍部付近が尾根を切断した上で高まっていることも微地形から読み取れます。この地点では、過去の発掘調査で古墳の盛土を確認しています。以上のことから、本来は墳丘長 200m 前後の大型前方後円墳であった可能性が高いと判断できます。

佐紀池ノ尻古墳の埴輪

円筒埴輪は破片ですが、野焼き焼成品で円または半円の透孔があります。突帯は細く突出し剥離面には方形刺突が認められます。底部高も 15cm 以上あり、外面はタテハケ調整を中心とします。外面には赤色顔料が塗布されたものもあります。盾形埴輪は、楕円形の体部に鱗を貼り付けて、正面に盾の文様を入れる鱗付盾形埴輪とも呼ばれるもので、古墳時代前期後半（4 世紀後半～末）の限られた時期にしか認められないものです。同様のものは富雄丸山古墳や不退寺裏山古墳でも出土しています。また、TG232 型式で類例のある須

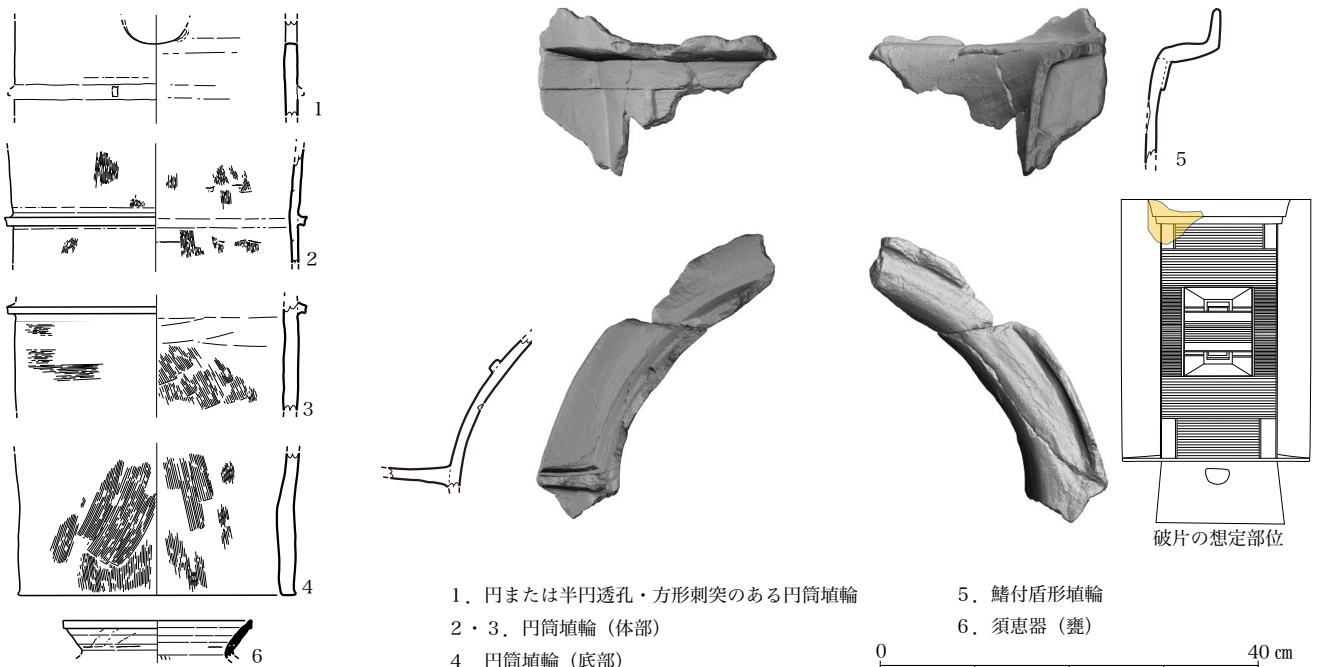
恵器甕片も出土していますが、埴輪よりやや新しく混入とみられます。以上の点から、コナベ古墳よりは古く、佐紀古墳群では西群の五社神古墳などに近い様相を示すものと考えられます。

佐紀池ノ尻古墳の評価

このように、佐紀池ノ尻古墳は佐紀古墳群東群で最初に築造された大型前方後円墳である可能性があります。そのため、西群から東群へは画期的に大型古墳の築造が移行したのではなく、移行期に大型古墳が並存しながら移っていったとみられます。このことは佐紀古墳群の造営集団を考えるうえで非常に重要であり、佐紀池ノ尻古墳がもたらす意義は今後の佐紀古墳群研究に大きな影響を与えるものと評価できます。



佐紀池ノ尻古墳出土埴輪 集合写真



- 1. 円または半円透孔・方形刺突のある円筒埴輪
- 2・3. 円筒埴輪（体部）
- 4. 円筒埴輪（底部）

- 5. 鱗付盾形埴輪
- 6. 須恵器（甕）

0 40 cm